

# 日本山岳写真協会 選抜展「それぞれの山」No.19

日時: 2022年11月10日(木)~16日(水)

会場: ポートレートギャラリー

<b>1 八ヶ岳秋冷</b>	池上 擴朗
紅葉の季節は終わったけれど、秋を惜しむかのような小春日和の八ヶ岳。 凜とした空気に覆われて、昨日の霧が冷えて霧氷となり、木や岩に花が咲いたように美しい。 暴風雪荒れ狂う厳冬期を迎える前の短い憩いのひとときだ。	
<b>2 吹雪明けて</b>	川瀬 正博
10月も半ばとなり、そろそろ北アルプスでは初雪が来るのではと思った。 天気予報から冬型となる日を見つけ、その翌日に立山へ向かった。 初雪は想定以上で、終日の猛吹雪となり、秋の景色を一変させた。降ったばかりの雪は眩く輝き、この上なく美しい。綺麗だ。	
<b>3 雪晴れ</b>	石塚 茂
厳冬期は閉ざされている室堂平。春から夏には様々な高山植物が咲き、秋の紅葉も良い。 例年11月中頃には一面の銀世界になるが、この年は暖冬で雪が少なく、前日降った雪と、太陽、雲、風の出会いが冬の厳しさを感じさせる。	
<b>4 厳冬に向かう燕岳</b>	斎藤 一久
コロナ禍の前は所属クラブの撮影山行に参加して初冬の燕岳に登るのが恒例となっていた。 最近ではなかなか撮影山行も儘ならないが、また、コロナを気にすることなく撮影に出かけることが出来る日を思いながら、11月下旬の山行で撮影した作品3点で厳冬に向かう燕岳稜線の情景を表現した。	
<b>5 厳冬 燕岳の夜</b>	関口 俊夫
冬季の北アルプスは非常に厳しい気象条件であり、容易に人を近づけないが、燕岳は山小屋が年末年始に営業を行っているため、その間は登山が可能になる。 北西の季節風が強く、特に夜間は厳しい撮影条件下ではあるが、凜とした空気感の中、他の季節では見られない一面を見せてくれる。 重い機材を担いで登山した苦労が報われる瞬間である。	
<b>6 忘我</b>	曾布川 善一
黎明から夜明けまでのわずかな時間、厳冬の烈風にたたかれながら宙に広がる群青の世界を見つめているとそこに吸い込まれそうになる。 月光に光る尾根道は主峰の頂を超えて天空にまでも続いているようで無限の宇宙へと誘われる。 朝日とともに指先の毛細血管に凍痛が走り、忘我の世界から現実に戻される。私はここに立つのが好きだ。	
<b>7 残雪の尾瀬・山ノ鼻</b>	緑川 邦雄
4月末残雪の尾瀬に入る。今回は山ノ鼻の小屋に宿泊する。冬の風雪に耐えきれず折れてしまったのだろうか？ 雪原に横たわる枯れ枝を前景として朝日を撮る。夕方西の稜線に弱々しく夕日が沈んでゆく。 真夜中至仏山の上空で月が輝き、その前を、強い風に吹かれて雲が横切っていく。 まだ目覚めたばかりの尾瀬がそこにあった。	
<b>8 穂高・春の輝き</b>	根本 研司
下界が新緑に萌えるゴールデンウィーク、穂高連峰はようやく厳しい冬が終わり、本格的な春山シーズンを迎える。 涸沢カールにはいく筋もの雪崩跡が交錯し、大きなデブリが残る。 カール底には色鮮やかなテントが立ち、それぞれのピークを目指す登山者で賑わう。 穂高が最も美しく輝く季節、それはなんとといっても5月だ。	
<b>9 残雪の候</b>	井村 榮二
ここ八方尾根は都会に近く、年間を通じて人気のある撮影地である。四季の中で、残雪期に焦点を合わせて撮影を行ってみた。 都会の6月と言えば梅雨時であり、気候的には不快感を我々は抱いている印象である。 しかし、山岳地帯は違う。厳しい冬の季節から脱して、融雪に若葉が芽を出し暖かな陽の光りに融雪する。 一日・一日の光を受けて山々は夏へと衣を変えていく。自然は常に動いている。遠くに目をやれば、早くも昨日の春景色ではなく、夏山の趣(おもむき)と見える。	
<b>10 尾瀬の朝霧</b>	鈴木 進
尾瀬に通い続けて思う。湿原の朝霧は出方も違えば消え方も違う。主役にもなれば脇役にもなる。 朝霧の寿命は、悲しいかな太陽の光を浴びると消えて行く儂いものだ。 中でもお花畑にできる霧は、最も幻想的だ。	
<b>11 白馬岳、夏の記憶</b>	鈴木 好一
チングルマ咲く白馬大池から白馬岳へ、忘れられない印象的な風景がある。船越ノ頭からは「坂の上の雲」まで続いているような稜線が美しい。小蓮華山付近にはハクサンイチゲ(白)、シナノキンバイ(黄)、タカネシオガマ(ピンク)などのお花畑が広がっていて、花越しの白馬三山が素晴らしい。 白馬岳、杓子岳を過ぎて、杓子沢コル(鍵ヶ岳と杓子岳の鞍部)から振り返ると杓子岳の西側斜面を横切る山路が空中へ白馬岳まで続いているようだ。思わず一枚撮りたくなる。	
<b>12 縦走路</b>	山村 信人
10代の時、徳島県の剣山スーパー林道から見上げた山肌に一筋の道が目に入った。その道の上には空しかない。 20数年後、その道(縦走路)を感動しながら初めて歩いている自分がいた。 剣山(太郎峯)から次郎峯にかけての稜線上の道は西にそびえたつ名峰三嶺、更にその先の天狗塚まで続く。 縦走に挑んでいる登山者の疲れた足を前に前に進めてくれる魅力的な道(縦走路)だ。	